

令和5年度 第2回スキルアップ研修会 実施報告

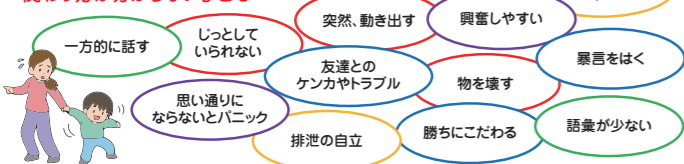
気がかりな子どもたちに関する事例研究会

- 日時：令和5年12月6日(水) 10:00~12:00
- 会場：福井県児童科学館(エンゼルランドふくい)
- 講師：福井県立ろう学校 教頭 常廣 和美氏
- 内容：基本講義、グループに分かれて意見交換、グループ発表、講師によるアドバイス



気がかりな子どもって?

- 病気の子ども⇒病気の対応、治療、医療的ケア
- 障害のある子ども⇒盲、ろう、肢体不自由、知的障がい、病弱
- 関わり方が分からない子ども



生まれながらの脳の特徴 状態は個々によって様々

発達障害のあるお子さんの一般的な特性

- 社会性…人とやりとりすることが苦手 その場の雰囲気やくみ取ることが苦手 常識や一般的な暗黙のルールが分からない
- コミュニケーション…相手の気持ちや立場を考慮してやりとりすることが苦手 冗談や皮肉が通じにくい
- 想像力…共通イメージを持ちにくい 特定の物事に強いこだわりがある 自分のルールを守りたいが 曖昧なこと抽象的なこと例え話などの理解が苦手
- 学習…特定の分野に落ち込みが見られる

- 注意…注意障害 多動性 衝動性
- その他…分離不安 社会不安 運動障害 場面緘黙 音いん障害 遺尿 昼間遺尿 チック 摂食障害 感覚過敏 など

一般的な支援のポイント

子どもが生活しやすい環境にすることが目的です

- 視覚的情報が理解しやすい…手帳 予定表 カレンダー 持ち物 社会的な文脈やルール 他者の気持ちやトラブルの構造 など
- 仲間による支援…他者に認められ、受け入れてもらえるという安心感、特に低学年までは有効
- 構造化の視点で…活動の構造化(スケジュール、一度に一つの活動、ルールは明確に分かりやすく、予め告知) 物理的構造化(活動に必要なものだけを出しておく、活動の場を限定する) 時間的構造化(一つの活動を定量化)

子どもが楽しく全力でおこなえるように

●気がかりな子どもは何に困っているかの背景を見極める事が大切だと改めて気付かされました。子どもの行動に対し、何に対して困り感(ストレス)を持っているのかを子どもの行動や声から具体化して基礎的環境整備と合理的配慮を施し、支援していきたいと思えます。

●勝ち負けにこだわる子への対応で、勝負の意味や、負けた時の気持ちやその後の行動を吹き出しに書いて、一緒に考える事で、子どもも理解しやすくなる事が、とても参考になりました。

●先生の講演の中で、子どもを知るにはミーティングの大切さや、今回のグループ討議のように、自分の意見をアウトプットすることで、頭の中が整理され、さらに深掘りして聞くと聞き、職場でもどんどん仲間と話し合いを密にしていきたいと思えました。また、職員同士が言い合える、話し合える仲間となることで、子どもの情報交換がよりスムーズとなることも感じました。

●他の市町の児童厚生員と意見交換ができる場が少ないので、たくさん意見が聞けて良かったです。色々なアドバイスを取り入れ、子どもたちが過ごしやすい場所を作っていきたいです。

気がかりな子どもは 何に困っている?

- 自分の気持ちを言葉で表現することが難しい
- 集団の中にいるのが苦手で落ち着かない
- 目、鼻、耳、皮膚が敏感で落ち着かない、嫌だ
- いろいろなことが分からなくて、不安だ(相手の言葉、きまり、物の置き場、始まりと終わり、自分がどうしたいのか…)

どうして「気がかりな子ども」となっているのかな。その背景を見極めよう!

いろいろなものが出てくると、どこを見ていいのかわからなくなる。キャンキャンする音も苦手だな。

本当はみんなの言っていることが、ごちゃごちゃして分からない。悪口に聞こえて不安。

やりたい気持ちはあるんだけど、どうやって伝えたいかわからなくて、手が出さず。

本当はひとり静かに過ごしたいんだけど、つかれているときには特に。

基礎的環境整備と合理的配慮



- 困っている子どもが「生活しやすくするための工夫」
- 本人、保護者、関わる人たちで話し合ってお互いの必要に応じて修正する。
- 本人にとって、必要かつ適当であること。
- 事業者にとって過度な負担にならないようにすることも大事。

二次的な障がいを生まないように…

- 情緒不安定、不登校、ひきこもり、精神疾患など
 - 周囲の正しい理解や適切な関わりによって防くことも、軽減することもできます。
- 例えば…「周りを困らせる行動ばかりする」といった誤解やレッテルの積み重ね、本人への叱責や注意をする言葉がけ、視線などが本人を苦しめます。
- そこで…合理的配慮を受けながら自分自身をえがき(目標の設定)、自分の良いところや課題を理解して、伸ばしたり対応を学び(構築、実践)、自分に必要な対応を理解し(援助要請)、成功体験を積み重ねて、自信をもち自己肯定感をもてるように!
- 子どもたちは幸せだと感じた瞬間がたくさんあったかな?

大事なのは「チーム」で支えること



講義内容をふまえて、それぞれの事例について、現状・課題・その背景・支援策について話し合いました。同じ行動でも子どもによって背景や理由が違い、支援策に正解はなく、子どもと一緒にチームで探っていくことが大事であると学びました。参加者同士で実体験を語り合い、得るものが多い研修となりました。

ふねんず

児童館だより

CONTENTS

- 令和5年度 第1回スキルアップ研修会 実施報告
- 令和5年度 第2回スキルアップ研修会 実施報告
- 第18回全国児童館・児童クラブ大会 参加報告

令和5年度 第1回スキルアップ研修会 実施報告

気がかりな子どもたちに関する事例研究会

- 日時：令和5年11月7日(火) 10:00~12:00
- 会場：敦賀市東郷公民館
- 講師：福井県立大学社会福祉学科 教授 吉弘 淳一氏
- 内容：基本講義、グループに分かれて意見交換、グループ発表、講師によるアドバイス



①全て想定内、②行動には全て意味がある、③背景を確認する、④目的の表情を確認、以上の4点をポイントとして気がかりな子どもたちへの関わり方や他機関との連携について理解を深めた後、グループでの事例研究では活発な意見交換を行い、実り多い研修となりました。

講義より…

キレない子どもになる育て方のポイント

キレやすい子どもは、生まれた時からキレやすい子どもというよりは、周りにいる人の関わりや環境、影響によってキレやすくなることもあります。つまり、「0か100」の価値観、「できたか、できなかったか」どちらかしか周りから、特に親から認められていないこと、親の価値観が優先されることが考えられます。本当は、その「0から100」の間には、その子どもなりの悩みや努力の足跡が残されています。しかしそのことを本人は振り返り、足跡を見るということはありません。何故か、その時のつらい自分に向き合うことにもなりすし、見たくないという感情にもなります。

しかしその間にあるのが「悩む力」=「考える力」=「忍ぶ力」=「キレない力」に変わっていくのです。特に子どもの心の中にある「もやもや」を周りにいる大人が言葉で相手に表現できるように引き出し、周りにいる大人がそのことをしっかりと受け止め理解することができるまでのプロセスが大切だと思います。

子どもがキレた時の周りにいる大人の関わりとしては、周りにいる大人が子どものどの様子に価値感を注視するかによっても変わってくるのですが、大人の側の価値感をまずは、ちょっと横に置いておくことが重要となります。そのうえで子どもの様子を「～せざるをえない」というようにその子どもの言動を「～」にいれて理解して受容しましょう。

それにはまず冷静な自分が今ここにいるのかを確認することが必要となります。その時に起こった子どもの怒りの感情自体を否定することはないようにしなければなりません。一旦受け止めていくことも親としての度量の深さになります。注意するのは、その怒りの矛先を人を傷つけたり、モノにあたってしまっただけに注意を要することです。少し時間をおいて落ち着いた時点でその理由を聞いてみましょう。こちら側大人の正論を一方向的に子どもに押し付けるのではなく、あくまでも「～せざるをえない」子ども側の気持ちに寄り添いながら受容してください。

「こんなに努力してもあなたはできなかった。だから…」ではなく、「あなたの努力はお母さんが一番よくわかっているよ。昨日は遅くまで勉強したんだね。それだけでお母さんはうれしいよ。お母さんは、結果を期待しているのではないよ、一生懸命がんばっている姿が…」と返事できれば、子どもが次への意欲を高められるのです。

※「キレない子どもになる育て方のポイント」(福井県立大学社会福祉学科 教授 吉弘 淳一)より抜粋

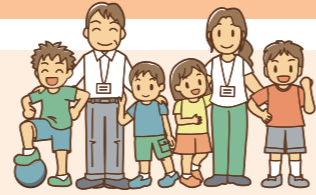
- 家庭や社会資源とつながり、つなげていく事が大切。地域の施設、担当者などを知っておく必要があり、学校とも密に連絡を取り、対応できたら良いと思えます。
- 余裕を持って子どもと接することの大切さや、工夫力、考える力を養うことがキレない子どもに繋がるなど、すぐに実践できるようなことを学ぶことができました。
- 常に自分は専門職についているという自覚を持ち、子どものあらゆる行動や言動にさまざまな想定をしながら余裕を持って関わることの大切さを感じました。社会資源等の知識を高める必要があることもわかりました。
- とても身近なテーマだったので、すぐに役立てられそうです。人から受けたキズは人でしか癒せないと教えていただいたことと余裕を持って対応することが心に残りました。
- 同じ職種の方と交流できたり、先生のお話を聞けたりしたのは大変ありがたかったです。

参加者の声

参加者の声



第18回全国児童館・児童クラブ大会 「今までもこれからもこどもDoまんなか」参加報告



オープニング

令和5年11月25日(土)・26日(日)の2日間、「第18回全国児童館・児童クラブ大会」が開催されました。今回の大会は全国の児童館・児童クラブ関係者が一堂に集う形ではなく、初の試みとして全国7会場をオンライン(Zoom)でつなぎ、オープニング、基調講演、エンディング等はメイン会場(東京会場)から各会場に配信され、分科会は各会場で議論した結果をオンラインで報告するハイブリッド形式で実施されました。

大会テーマは「今までもこれからもこどもDoまんなか」。523名の全国の児童館・児童クラブの職員、福祉及び教育関係者、行政担当者等が参加し、現在児童館・児童クラブが抱える悩みや課題などを共有するとともに、こども基本法(令和4年法律第77号)の基本理念を踏まえて、あらためて地域の子どもの居場所としての児童館の役割やこれからの児童館あり方などについて研究協議が行われました。

基調講演(シンポジウム) テーマ「遊びで子どもの意見を聴くために」

コーディネーター植木信一氏(こども家庭審議会こどもの居場所部会委員、新潟県立大学人間生活学部教授)は、「こどもの居場所づくり指針には児童館が組み込まれており、今後こどもの居場所の選択肢の重要な1つに明確に児童館が位置付けられている。児童館をこどもの居場所として作り上げていく責任や責務がある。」と課題提起されました。井垣利朗氏(八王子市川口こども・若者育成支援センター センター長)は、子どもの声を「手段」ととらえ大人に都合の良い声だけを聴くことはせず、受け止めたことをフィードバックすることが大事」とこどもの声の聴き方とその対応について語りました。また、荒木裕美氏(こども家庭審議会こどもの居場所部会委員、石巻市こどもセンターらいつ館長)は、「子どもの権利を大きな柱にしている「らいつ」では子どもたちは施設の運営ルールなどを一緒に考えてくれる仲間であり、利用者の視点を教えてくれる。最終決定の場にきちんと子どもがいることが大事」と子ども主体の運営のポイントについて話しました。



基調講演(シンポジウム)

分科会

いずれの分科会も「こどもの居場所」や「こどもの声を聴く」について事例発表や意見交換が行われ、児童館職員が日頃から子どもの声に耳を傾け、やりたい気持ちに寄り添うことが重要であることを再確認しました。

分科会(意見交換の様子)



分科会	テーマ
第1分科会(北海道)	可能性は無限大! こどもと共につくる児童館・児童クラブとは?
第2分科会(北海道)	Doなる?Doしてる? 小学校高学年からはじめる10代の居場所づくり
第3分科会(東京)	児童館からの発信! ～こどもの声を聴くということ～
第4分科会(北信越)	スタッフの発見力を向上↑ ～アソビ×自然パワーで子どもが自ら育つ力を育む～
第5分科会(関西A)	おとなの考え×こどもの声 ～とびきり居心地のいい場所!児童館～
第6分科会(関西B)	+あそび(あそびたしざん)
第7分科会(四国)	こどもまんなか社会の「切り札」こそ児童館!! ～子どもの居場所を再考する～
第8分科会(沖縄)	あそびplus福祉

エンディング

分科会会場をZoomでつなぎ、各分科会のリーダーから分科会の様子、話し合った内容、検討結果等について報告がありました。こどもまんなか社会の実現に向けてこれからの児童館のあり方やあるべき姿、「こどもの居場所」や「こどもの声を聴く」ことについて活発な議論が交わされたことが報告されました。また、全国児童厚生員研究協議会と大会参加者一同でこどもまんなか社会の実現に向けて「全国発議」(下記参照)を全国に発信しました。

全国発議



分科会報告(リレー中継)



次の全国大会は令和7年2月15日(土)・16日(日)に愛媛県で開催されます。1年後、愛媛県でお会いしましょう!

第18回全国児童館・児童クラブ大会「全国発議」こどもDoまんなか宣言

私たちは、児童館・児童クラブがこれまで地域のこどもの居場所として社会的な役割を果たしてきたことを自負するとともに、こどもまんなか社会の実現に向けて、これからもさらにこどもが安全に身を置ける場、安心できる心の拠り所として、こどもの声や気持ちを受け止め、こどもの最善の利益の優先を考慮し、地域社会の期待や保護者の負託に応えていくことを宣言します。

令和5年11月25日 全国児童厚生員研究協議会、第18回全国児童館・児童クラブ大会参加者一同

※大会の詳しい様子は、4月下旬に一般財団法人児童健全育成推進財団HP (<https://www.jidoukan.or.jp>) に掲載される予定です。ぜひご覧ください。

全国大会に参加しました!!

県内児童館・児童クラブ職員の参加者の声

神山児童館 上木 幾重

初めて大会に参加させていただきました。全国の方とZoomで繋がりが、仲間がこんなにたくさんいる事に勇気をもらいました。また、運営をされている方々の明るさや情熱に心うたれました。いい刺激となりました。今回は諸事情により、交流会の参加はできませんでしたが、次回は参加して、もっと他館の事や、どう思うかで仕事をしているのかなど聞いて交流を深めたいと思いました。



《基調講演》テーマ「遊びで子どもの意見を聴くために」

今回初めて全国大会に参加してみて一番感じた事は、地域性もありますが、子どもも大人も「遊び」に一緒に楽しく取り組んで、安心、安全を保ちつつ、決して勝手ではなく「自由」を上手に引き出して、子どもの声を聴いている施設が多くあるということです。

印象が強かったのは「児童館駄菓子屋」という取り組みです。子どもと地域をつなぐというコンセプトで子どもたち目線から、「机を低く」「食べたい物を取り入れる」といった声を地域の大人に届け、それに大人が応え、店を開業・開店したということです。

もう一つは2011年3月に起きた東日本大震災を機に「復興まちづくりアンケート調査」を行った結果、町の為に何かをしたいという9割近くの子どもの声により「子ども町づくりクラブ」が発足し、守られるだけでなく自分たちで考えていく「子ども会議」という子ども主体の会議をしているそうです。

どれも、私の児童クラブでは、なかなか取り組みが出来ない事ですが、同じ子どもを見守る所でも、こんなにも積極的な取り組みがあり、大きな違いがあるのだと痛感しました。

春江第一児童クラブ 正津 麻紀



『あそび』というテーマの話では、「あそぶ力は生きる力を育むものであり、心のストレス発散であること。」や「そのあそびを子どもが自ら企画し、失敗が許される経験が子どもたちの成長や発達を促す。」と教わりました。必要以上に大人が決めてつけず評価をしないことで、あそびが終わったあとに本音を話すこともあり、その本音が本格的な相談に繋がることもあるので、あそびを通して子どもの意見を聞くことは「命を守ること」であると学びました。

朝日児童センター 橋本 智恵

第4分科会(北信越)

「アソビ×自然パワーで子どもが自ら育つ力を育む」というテーマのもと、グループワークを行いました。まずはじめに、「子どもは何で困っており、何の力が足りないのか。」ということ話し合いました。その後、それを解決するために、自然の中でどのような遊びを提供できるのか話し合いました。他の県の児童館の先生方との意見交換では、他の児童館の環境を知ることができ、大変参考になりました。また、自然の中で五感を使って遊ぶことにより、様々なことに対する興味関心が広がり、将来の選択肢が広がるという意味で「アソビ×自然パワー＝無限大」であるということがわかりました。

2日目には、新潟県立こども自然王国で、屋外でのウォークラリーを体験しました。途中出されるクイズや課題について、葉っぱなどの自然物をこすってぬりえをしたり、種類のわからない植物の葉のにおいを嗅いだり、体全体を使って木の幹や橋の長さを測ったりするなど、自然の中でさまざまな感覚を使いました。まさに分科会で学んだ「アソビ×自然パワー＝無限大」を体験できる活動でした。



福井県児童科学館 大野 貴也



第5分科会(関西A)

大型の児童館や学童を行う施設など多くの方と話すことが出来ました。普段自分の館だけを見つめて動くことが多いので、最初「居心地の良い場所の写真を持っていく」という宿題に戸惑いました。自分の館の居心地の良い所・・・と思い探した自分の中では当たり前風景でしたが、班の皆さんに「それ良いね」と言ってもらって、心が温かくなりました。

施設面における良い所の充実も大切ですが、「石巻市こどもセンターらいつ」で行う

「子ども会議」がとても素敵でした。子どもたちだけで行われるその会議では、ポジティブな約束を考えていこうと。廊下は歩く・片付けは丁寧に優しく等、ネガティブな言葉を避けると子どもたちの心に響くそうです。ポジティブな言葉を考える子ども会議はすぐにでも取り入れることが出来るので、早めに開催してみたいと思いました。

『京都の子どもの意見を聴こう』の時間では、以前に児童クラブに通っていた中学生の子と話をしました。当時の思い出を聞く中で印象的だったのは、注意されることも嬉しかったという言葉でした。負の感情を子どもたちに渡してしまうと思える注意も、自分を見てくれていると思える時間であると知りました。もちろん普段の関係性が強く出る場面だと思おうので、そう思ってもらえるよう日々のかかわり方を見つめなおしていきたいです。実際に学童を過ごしていた子と話す貴重な時間で、当時の思い出話も子どもたちと接する上での新たな考えを与えてくれました。

「児童館を誰にとっても居心地の良い場所に」それを第一に考え、今後も子どもたちの笑顔を遊びを通して引き出せるよう楽しく過ごしていきたいです。

武生西児童センター 新谷 愛子